

親鸞思想の解明

テーマ：「浄土を求めさせたもの --『大無量寿経』を読む--」

第128回(2020.1.9)の要旨

拝読文(『真宗聖典』73～頁)

義なく礼なくして顧難するところなし。自らもって職当して諫曉すべからず。六親眷属の所資、有無、憂念すること能わず。父母の恩を惟わず。師友の義を存せず。心に常に悪を念い、口に常に悪を言い、身に常に悪を行じて、曾て一善なし。先聖・諸仏の経法を信ぜず。道を行じて度世を得べきことを信ぜず。死して後に神明更りて生ずと信ぜず。善を作りて善を得、悪を為りて悪を得と信ぜず。

「無義無礼」とあります。これは義礼、つまり相手を思って大切に尽くす、ということが、ある意味で人間関係を平穏にしていくためには当然あってしかるべきだと。ところがそれが無いことがここで教えとして立てられています。

これが、常識的な、一般的なレベルの話ですが、親鸞聖人のお言葉などには、人間というものは、本来不実であり真実はないというのがあるのです。こういう言葉が善導大師とか、その先輩であった曇鸞大師とかによって教えられていて、人間が凡夫として生きている限りにおいては傍若無人であるということが当たり前のようになっているのだ。

親鸞聖人は、教えを非常に忠実な形で受け止めた場合に、結局、自分が真実ではないと。こういうふうに自覚する。

それでは何をよりどころにするのかということ、当然求めざるをえない。それは如とか法性という、人間の人為性というものでは届かない在り方が本当のものとしてある。そこに教えが立てられるわけです。

しかし、道を求めるという心はあるけれども、求め方が本気なのかという問題もあるし、求めようとしても自分がその教えにそぐわないような心をおこしてしまう。こういうことについて自己矛盾というか、真摯に、真向かいになって自分に引き当てていこうとされたのが、親鸞聖人なのです。

自身はどこまでも凡夫でしかない。どこまでも愚かな身でしかない。そういう事実を引き受けながらしかもどういう形で生きうるかと。こういうことが、信心をいただいたということの中に、理想の人間に成ったことではなくて、やはり煩惱の身でしかない身であるというところに立って、しかも本願力をいただいていけるという道を見いだしたという意味になるわけです。

それをどう表現するかというところに大変苦勞されたのだと思うのです。私は晩年の作とされる「悲歎述懐和讃」に善導の三心釈を背景にしながらも独自の了解が出ていると思うのです。「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身に 清浄の心もさらになし」とありますが、これは善導の「機の深信」をそのまま書いているわ

けです。善導は、「機の深信」つまり人間の愚かさとか暗さとか、煩惱の身だということとか、そういうことを本当に自覚するということと、本願他力を本当に信じて、信ずればそこに救いが来ると信ずるということとは一つの信の中の二つの面だと述べました。

そのことを親鸞聖人は「悲歎述懐和讃」を通して明らかにしようとなさったのではないかと思うのです。それを見ますと「無義無礼」という言葉が、親鸞聖人の言葉で言えば「無慚無愧」という言葉になる。

慚愧は恥じという心理ですが、恥じという場合に天に羞じ地（人）に羞じと『涅槃経』では註釈されている。親鸞聖人の「信巻」の『涅槃経』の引用にもその註釈がそのまま出ています。

ですから慚というのとは、同じ恥だけれども道理に羞じる、あるいは教えに羞じる。愧の方は人に羞じるわけだから、倫理にもとるとということが恥ずかしいと。こういうようなふうに理解できるわけです。同じ恥じという心理だけれど、恥の質に二種類の恥じがあるというのが、慚と愧という言葉に分かれてくるもとなのです。どちらも恥ずかしいという心理です。それを親鸞聖人は、無慚無愧とおっしゃるわけです。慚愧がないということは、単に倫理的なものはどうでも良いという話ではなくて、もっと存在の道理の方に向かって恥じるということがないのではないかというのが親鸞聖人のお言葉の本意だろう思うのです。

「信巻」に「悲しきかな、愚禿鸞」という言葉があるのと同じようなニュアンスで、眞実信心を得ているにもかかわらず相変わらず自分の本心は他力を仰ごうとはなっていない。それが恥ずべきである。

しかし、「無慚無愧」について「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」とも述べられるのです。

つまり如来の名号というものが、大悲の表現として与えられていることを信ずる。そうすると、『歎異抄』にありますように、「ただ念仏のみぞまことにておわします」ということの意味は、念仏を眞実の依り処として大悲の本願を信じていくということが成り立つ。そこに、どれだけ人間が罪悪深重であろうと、それと矛盾せずに大悲を信ずることが成り立つ。大悲なのですから、無条件的慈悲です。

どのような衆生であろうと、必ず救い遂げるのだと。如来の大悲はどこまでも待ち続ける。大悲を信ぜよと待ち続ける。大悲は無倦、つまり倦むこと、あきることがないのです。しかし、そういうことは人間にはできません。

大悲はそのようなこともご承知の上なのです。その上で、大悲を本当に仰いでほしいというのが、大悲の深い願いなのです。

人間の努力心は必要ないのです。無慚無愧のこの身にまことの心はありません。そうでありながら、真実の心になろうとすること自体が自己矛盾であり、自分は真実心になれないというような苦悩を与えてしまう。しかし、そのような反省は必要ないのです。

無慚無愧であるこの身は、それでいいのだというわけではない。無慚無愧という事実でしかないのです。いいも悪いもない、無慚無愧なのです。この五悪段を通してこれでもかというような悪の教えがあっても、何か人間は自己肯定をしたいし、自己弁護をしたいわけです。

けれどそうではないような、公明正大な如来のお心の前に、お前の心は本当にそうなのかというふうに確かめが与えられてくる。そうすると恥ずかしいという心が起こるということなのです。

そして「顧難するところなし」。顧難とは、難しいことをかえりみるという意味ではなくて、無義無礼であってそれが人にどういうわずらい、悲しみ、痛みを与えるかということについての思いやりがない。こういう意味だろうと思うのです。

そして「自らもって職当して」と。職とは、現代語の仕事というようなことにもなるわけですが、責任をもって当たるべき仕事と言えるでしょうか。与えられた分限を自分の分限だとして勝手にそれを用いる。そして「諫曉すべからず」。教えていさめて、そうしてはいけないよということを書いて、その罪悪をあきらかにすることができないのだと。聞く耳を持たないということがあるけれど、教えることが成り立たない。

「六親眷属の所資、有無、憂念すること能わず」。六親眷属がたすけとして生活の糧になるようなものを持つか、持たないか。そういうことが「不能憂念」、こういうことは心配だとか、そういうことでは申し訳ないとかいうふうに思わない。それでいいのだと思っている。凡夫が本当に凡夫まるだしになったら、こういうことなのだ。

そして「父母の恩を惟わず」。父母の恩を思わないということは、本当に我われはなかなか気付かないものです。つまり恩というものは分からないのですね。悲しきかな、そういう存在なのですよね。

そして「師友の義を存ぜず」。それぞれ先生や友達との間柄にもやはりそれぞれ義というものがあるわけでしょう。そういうふうに当然あるべき在り方がある。でもそういうことがないと。

「心に常に悪を念い」、これもよっぽどの場合でしょう。常にというけれど、安田先生は、我われは善悪の間に揺れる存在であって悪業だけをするということになったら、それは天才だと言っていました。

ここでは、「心に常に悪を念い、口に常に悪を言い、身に常に悪を行じて」とあります。ここに身口意があります。悪を念うというのは心です。口に常に悪を言いということは口業、言葉です。そして身に常に悪を行わず、これは身の行為となった行為ですから身業で

す。業の本質は意だという説があるのです。中に起こった意思が心を動かし、言葉もはかせるし身体も動かしてしまふ。そういう本質は意であると。こういうふうに言われています。

「曾て一善なし」、一つの善もないと。地獄的人間と言ってもいいかも知れませんが、そういう因縁というのは、極端な場合ですよ。

「先聖・諸仏の経法を信ぜず」先に仏道を求めた人を先聖と言っているわけです。諸仏、これは大乘仏教では仏を複数で理解しますから諸仏と。その経法を信じない。

「道を行じて度世を得べきことを信ぜず」。人間が生活する空間にある道というのは、現実の道ですが、それを意味として人間の生き様の在り方の比喩とするわけです。そうすると道が単に空間的な道ではない、人間にとっての歩むべき在り方ということをも道という言葉で教える。仏道もそうです。仏の道、仏が歩いた道だと、そのようなことを言っているわけではない。仏になるべく菩提心を発して教えを信じて、教えを生きて行くということが道になるわけです。そういう意味で道を行ずるとするのは仏道を生きるということですよ。

そして世を超えるということをも度世というのです。一語で説明するのは難しいですが、世を超えて世を生きるという。そういう意味を持った言葉なのです。「道を行じて度世を得べきことを信ぜず」とは仏道を生きていって本当にこの五濁の世を超えるなどということがあるとは信じない。

「死して後に神明更りて生ずと信ぜず」、ここに来るとまた問題があるのですけれど、靈魂が六道流転するという考え方が背景にあります。幽霊になったりするような靈魂が生まれかわり死に変わりして、その度に身体が変わったり人間が変わったりしながらも靈魂は変わらないでずっと生きて行くという。そのように信ずるということをよしとする立場が今ここでは言われています。

仏陀の言葉でこのような言葉が出て来るというのは少しまずいと思います。しかし、中国人に教えようとする、そのような言葉が教えになってしまうのです。

生命というものは本当に不思議な作用です。物質が生命になるということが不思議なことなのです。生命になるということは、ある意味で物質を吸収しながら代謝して命が持続していくことですよ。そしてその命も死んで行くわけですが、新しい命を生むようなことが起こって命自身が繰り返し、繰り返し、新しくなって生きていく。そういう在り方がある意味で、一人の人間がそこで終わるのではなくて、生れ変わった如くにしてまた生きて行くというような信念になるのでしょう。

編集担当：田村晃徳（親鸞仏教センター嘱託研究員）